

「蛇性の姪」の主題と構想

——人間像の形象をめぐって——

金 田 文 雄

「蛇性の姪」の主題と構想

雨月物語巻之四に収録された「蛇性の姪」は、他の作品がそうであるごとく翻案文学としての性格を有しており、警世通言「白娘子永鎮雷峯塔」、西湖佳話「雷峯怪蹟」、源氏物語などがこれまでにその典拠として指摘されてきた。しかしその一方で、この作品の持つ主題性については、これまでに先学によりいくつかの諸説が提示されているが、なお統一した見解の与えられていないのが現状のようである。

一つは中村幸彦氏によって解されたもので、豊雄を主人公として見ることによって、この豊雄自身が生来持っていた一片の「まめ心」が、丈夫心チカラココロとなって行く過程にその主題をとらえようとするものである。¹⁾ たしかに雨月物語全体の中でも指摘され、また晩年の「春雨物語」においてもなお見られるところの秋成文学の思想性のあり方を考えれば、こうした見方には一応十分な説得力があると言えるであろう。たとえば、同じ雨月物

語に所収された「青頭巾」に快庵禪師の言葉として端的に示された「心放せば妖魔となり、収むる則は佛果を得る」という発想や、後の春雨物語の「樊噲」の末尾に示された「心納れば誰も佛心也。放てば妖魔」といった思想は、秋成の文学全体の上に大きく投影されたものであり、今掲げたこれらの二作品においては、とりわけこの思想性が物語そのものの核心となっているものである。そしてこのことは、同時に他の作品についても概ねあてはまるものであり、善悪をはじめとして、いっさいの規範を嫌った秋成の人間観を示す思想性の大きな特質であるとも言い得るものである。したがってそうした思想性のあり方に延長上にこの作品を見ようとする時、「蛇性の姪」もまたたしかに先掲の中村幸彦氏の説のごとく、豊雄の人間成長の物語として読めるのである。

さて、最初にもふれたごとく、雨月物語はその全篇がなんらかの形で中国白話小説に原典を持ち、またその上にさまざまな典拠を重ね合わせて書かれた翻案小説である。したがって、当

時のこの作品を鑑賞した読者層にとつては、遂一その原典が何であるのかを発見してゆくところに楽しみがあり、また物語の側からもそれを要求するものであった。「蛇性の姪」もこの点において例外ではなく、そのプロットの中心をなすものとして、中国白話小説「警世通言」巻二十八の「白娘子永鎮雷峰塔」が指摘されている。²⁾ 原典では、薬屋の番頭の許宣が白娘子（大蛇の化身）に魅入られ、脅迫されるが、最後には鉢でこれをとり押さえ、禪師が永遠にこれを封じるといふものであり、その構想自体をはじめ、白娘子が許宣に与えた銀子をもとで彼がとらえられること、また役人が白娘子を捕縛に行くとその邸がすでに廃屋と化していたことなど、その細部にいたるまでが「蛇性の姪」においてプロットの中にとりこまれていた。ところが「白娘子永鎮雷峰塔」は、民話としての性格を強く持ち、また講談として民衆に語られるための台本であったが³⁾ ために、その興味の中心は、あくまで奇談そのものの中にあり、通俗的な現実感覚に根ざしたものであった。したがって、そこには高い芸術性・思想性といったものは望むべくもないものであり、そこで秋成がこの原典をいかに細かく吸収し、またいかに芸術的価値を付与していったかという点に、読者の興味の焦点が置かれることになるのである。

主人公について見れば、まず許宣は薬問屋の番頭として設定されているが、もちろんそこにそうであるための何らかの必然

的な理由があつてのことではなかった。いやむしろ個性的な何者かであることは、不必要であるばかりか、物語の上ではそのことはかえって邪魔になるとさえ言えるであろう。なぜならば原話においては、この主人公は特定の誰かであることよりも、どこにでもいそうな不特定の平凡な人物でなければならず、そのあたりまえの男がいかにもありそうな奇談にまぎ込まれてゆくという構想がとられているからである。

秋成の手になる一方の豊雄は「生長優しく、常に都風たる事をのみ好て、過活心なかりけり」と描き出されており、紀の国の大宅の竹助という「海郎どもあまた養ひゝ家豊かに暮ら」す大きな漁家の三男として設定されている。また「質朴にてよく生産を治む」太郎をたくみに配したことは、浮浪子としての豊雄の立場・性格をもいっそう強調するようにもなっており効果をあげている。この優しくはあるが過活心のないという豊雄の基本的な性格設定は、雨月物語を概観すればすぐさま、「生長て物にかゝはらぬ性」を持った「浅茅が宿」の勝四郎や、「吉備津の釜」の正太郎を想起させる。あるいはさかのぼれば「世間妾形氣」三之巻第二話の「米市ハ日本一の大湊に買積の思入」、続く同第三話の「二度の勤ハ定めなき世の淵瀬」に描かれた才太郎もまたこの系譜に属するものであろう。そして同時に、それはまた同じく浮浪子として若き日を送った秋成自身の、自己の投影でもあったのである。⁴⁾ これらの作品に見られる

ごとく、秋成がその物語の主人公を単なる素材として作品の中に配したのではなく、自己の内部を深く見つめ、その自己内省の外化の方法として、人間像を物語化しえていたことは、雨月物語がその原拠となった中国白話小説を大きく凌駕したばかりではなく、小説の発生とも称される所以でもあらう。

近代小説のそれと比すれば、はるかに単純であると言わざるをえない豊雄の性格造型ではあるが、ところがここでは、単に豊雄のそうした都風たることをのみ好む浪漫的な夢多き性格が十分に個性化されたというだけの意義にとどまらず、このことはプロットの展開の上でも、大きな影響を持っていた。この作品では「白娘子永鎮雷峰塔」を典拠としている以上、秋成の構想の順序としては、原典の物語に無理のない主人公を選んだとも考えられるが、雨月物語においては、むしろ主人公の性格造型が物語のプロットを進行させてゆくという所にその特質を持っている。すなわち「蛇性の姪」においては、豊雄のこうした性格が一つの核となつて、物語の展開は同時に豊雄の性格造型でもあるという混然とした二重構造をとっているのである。

豊雄が蛇の化身である真女子に魅入られるのも、あこがれを内に秘めた雅びな性質に起因しているとともに、「御見送りせんも却て無礼なれば、此傘もて出給へ」と重ねてすすめるような、そうした優しさによるものにはかならない。すなわち、たまたま豊雄がその場に居合わせたという偶然以上のものが、そ

こにはすでに用意されているし、また真女子に再会するものも「また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却て奇しきみゐたる」といった豊雄の夢見がちな性格が、邪神を招き寄せたともいえるのである。したがってこの豊雄にあっては、真女子に魅入られた存在であると同時に、内的にもこれに呼応しうる素地を初めから運命的に持っていたのもあった。

これに続くくだりでも、真女子から「千とせの契」を求められた豊雄は、「罇の鳥の飛立ばかり」と歓喜の極に達しながらも、なおかつ「おのが世ならぬ身」を顧みるのであり、そこに生ずる煩悶が、次の第一の破局の伏線としても構成されているのである。すなわちこの時真女子からもらった太刀が翌朝兄の太郎に発見され、これが大臣の寄進物の盗品であることが発覚するところがそれである。そして豊雄は捕えられ、また真女子を捕えるべく武士達がかつけけると、懸の何某の邸であつた筈のところは、すでに廃屋と化しており、鳴響く霹靂とともに、真女子がその正体の一端を初めて豊雄の前に現わすところで物語の序章は終っている。

この事件を含めて、これ以降も物語は「白娘子永鎮雷峰塔」に従つて展開して行くのであるが、中段において吉野に詣でた時、再び真女子の正体が現われ、豊雄はそこで当麻の酒人という翁に

「番你が秀麗に衽けて你を纏ふ。你又番が假の化に魅はされて丈夫

心なし。今より雄氣^{をこさき}してよく心を静まりまさば、此らの邪神^{やら}を逐はんに翁が力をもかり給じ」

とさとされる。そしてこのことが一つの大きな契機となつて豊雄は「丈夫心」へと成長してゆこうとするのである。そして終末部においては、原典と同じく禪師の法力によつて蛇を封じ込めるという形をとりながらも、それが「蛇性の姪」では豊雄の唯一のとも言いうる意志的な決断においてなされていることに原典との大きな違いと意義が見い出される。富子に乗移った真女子に向かう鞍馬寺の駿なる僧も蛇の毒氣にあたつてついに命を失い、今はもはやいかんともしがたい状況に追いやられた豊雄は

おのが命ひとつに人／＼を苦しむるは実ならず。今は人をもかたらはじ

といった自己を捨てた崇高ともいえる決意性を示すにいたるのである。これは豊雄が「心を収め」えた時に初めて達成された境地であり、先述したごとく雨月物語に見られる秋成の人間観を考え合わせ、これを換言すると、生長^{ひとなま}優しき豊雄はその「あだ心」の故に蛇性に魅せられたのであり、心収め「実心」を知った時について「丈夫心^{ますらふこころ}」に達したと言えるであらう。さすれば「あだ心」と「実心」とは畢竟その基を同じくするものであり、それはせんじつめれば「直くたくましき性」に帰一してゆくものでもあらう。

一般に秋成の文芸にあつては性は^{さが}その原質的な性質を表す言葉として用いられるが、ただそれは一定の形式を持った規範性の中に求められるものではなく、逆に一切の規範を超越したところにあり、根元的な人間性の中に求められているものである。

蛇性に魅せられるのも、またこの同じ蛇性に身を捨てて立ち向かうとするのも、ひとえに豊雄の性の^{さが}発露であり、そのあり方の中に、彼の転生の物語として描かれたのがこの「蛇性の姪」であつた。そしてまたその点にこそ、この作品が「人間追求の文学」たりえている理由も存するのであらう。

註

- (1) 「上田秋成集」(日本古典文学大系)解説。
- (2) 長沢規矩也氏の「日本文学に影響を及ぼした支那小説」(江戸文学叢書所収)にこの指摘があり、後藤丹治氏の「中国の典籍と雨月物語」(国語国文昭和二十七年十二月号所収)に詳しい。
- (3) 勝倉寿一「雨月物語構想論」(教育出版センター)
- (4) 鶴月洋「雨月物語評釈」(角川書店)
- (5) 中村博保「小説の発生」(別再現代詩手帖卷三三所収)
- (6) 前掲「雨月物語評釈」

二

前節では主として「白娘子永鎮雷峰塔」との関係にふれながら豊雄の人間像の造型について述べてきたが、次には真女子について考えてみたい。

雨月物語の九篇のうちで「浅茅が宿」「吉備津の釜」、そしてこの「蛇性の姪」の三篇においては、それぞれ宮木、磯良、真女子という特異な女性像の形象にあてられている。ところが、この三人を外面的な客姿の描写に限って並列してみると、そこに顕著な違いのあることに気がつく。

人の目とむるばかりの容かたち(宮本)

うまれたち秀麗みづみづ(磯良)

と、この二人に関しては物語の初めの部分でそれぞれが登場するくだりにおいて、このようにその容姿の美しきことが端的に叙述されている。しかもこの二人はともに美しくはあっても、それが特に個性的にきわだったものでもなく、けっして一般像の域を出るものでもない。このことはもちろんこの二作品の主題構想の上に大きく関わっていることは言うまでもないが、ここで「蛇性の姪」における真女子の描写を次に見てみたい。

- ① 見るに近まさりして此世の人とも思はれぬばかり美しきに
- ② 顔容かたち髪のかゝりいと艶にほひやかに
- ③ 面おもてさと打赤めて恥かしげなる形の貴あてやかなるに
- ④ 花精妙はなぐはし櫻が枝の水にうつろひなす面に、春吹風をあやなし、梢たちぐ々鶯うすの艶にほひひある聲して、

序段にあたる部分だけで以上の四カ所にわたって描かれている。しかもそれが単に美しいというだけではなく、①でのようにその美しさがことのほか強調されているし、またこうして抽

象的に形容されるにとどまらず②③に見られるごとく具体性をもって動きの中に妙みに描写されている。あるいは④では、その声にいたるまでが比喩を用いていっそうことこまやかに描かれていることに注意したい。

このようにしてみると少くとも量的にはこの真女子に関してはその視覚的な効果をはじめとした外面の描写そのものが秋成の構想の中で重要な要素をしめていたことがうかがい知れるであろう。しかも真女子に対するこうした描写は、その容姿だけにとどまらず、都風みやこふうたその立居振舞から「今の詞は徒ならねども、只酔まがごとぐちの狂言におぼしとりて、こゝの海にすて給へかし」といった言葉のひとつひとつにいたるまでが豊雄のあこがれを満たし、また官能をあおりたてるものとして周到に描かれているし、それはまた読者をして王朝的な揺曳の中にいざなうような効果をも合わせ持っている。ところが今少し見方を変えてみるならば、この官能性の中には、どこにも深い精神性が求められてはいない。いな、むしろそうしたものの入り込む余地を拒絶するためであるかのごとく秋成の筆はすすんで行く。

豊雄はその真女子の美しさ故に彼女に魅せられ、ひたすらにその蟲惑的な妖艶さの中に惑溺してゆくのであり、そこには一種の退廃的なものさえが漂っていた。けだしこの真女子の美しさは「此世の人とも思はれぬばかり」とさりげなく暗示されていたごとく、まさしくこの世の人ではない異類のもののみが持

ちうる美しさだったのであり、それは表題に示されたごとくまさしく蛇性のそれであった。もちろんこれは典拠の中心をなす「白娘子永鎮雷峰塔」の設定にもとづくものであるが、豊雄との恋のたてひきにおいてその魅惑を増してゆく真女子は、蛇性であるが故の比類なき美しさをいかなく發揮し、その造型は原典をはるかに凌駕しえたものとなっている。

真女子を中心に物語の展開を追ってゆくならば、その造型は前半（吉野でその正体があばかれるまで）と、後半とでは大きく違ったものとなっている。とりわけ序段において、豊雄の優しさに魅かれそれに応えてゆこうとする真女子の心情は、それ自体ではきわめて人間的なものであり、また同時に女性的な感性に満ちあふれたものである。たとえその本性が蛇性であるとしても、（あるいは魔性のものであるが故にそうであるとも言えるのかも知れないが）優雅で王朝的な雅びさを持ち、豊雄を想うひたむきな心情が真女子像の中には形象化されている。したがって序章における真女子は、ある種の妖しさを持つとはいえ、それがむしろ情調の中に溶け込み、けっして蛇性として豊雄に接しているように描かれていない。ただその想いが強く、ひたむきであるが故に、豊雄を喜ばせるべく太刀を彼に贈るのであり、これとてその招来した結果がいかなるものであるか、真女子の中にはいかような邪意も存在しなかったのではあるまいか。しかし、その真女子の行為は豊雄個人には受け入れ

られはしても、太郎を中心とした現実の家・社会にはとうてい容認されえないものであり、ここに真女子にとって不幸にもその第一の破綻が生じてくる結果を生み出すのである。すなわち人間界の現実と対峙した時、真女子は本来の蛇性に帰らなくてはならず、霹靂をふるう以外にはなかったのである。

この事件が豊雄を真女子から一時的に遠ざけることになり、彼は姉のいる大和の石榴市へ行くことになるが、その豊雄をひたすらに想う真女子はここにもまた尋ね来たる。そしてこの真女子の哀切なばかりの心情は「女しきふるまひ」として姉夫婦にむかえられ、ここに

千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜／＼ごとになつ雲も、初瀬の寺の暁の鐘に雨収まりて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。

と表現されたような、つかの間の二人の愛欲の密月がくりひろげられることになる。この「あひあふ事の遅きをなん恨みける」という感情は、豊雄自身のものであると同時に、真女子のそれでもあり、このかぎりでもそこには、かならずしも姪蕩、しかも蛇性のとはいえないものが認められよう。

ところが、この悦楽の日々も吉野行によって破られる時がくる。すなわち翁に「熟その面を見るに、此隠神のために悩まされ給ふが、吾救はずばつひに命をも失ひつべし。」と指摘されたことがそれであり、ここに初めて「邪神」の「年経たる

蛇」であることが暴露されるのである。蛇性の姪が真女子にとつての本質であつたとするならば、その愛欲の日々こそはまさに真女子にとつての生そのものであり、生命の謳歌の時にはかならなかつた。しかも、ここでも真女子の側にはやはり豊雄を喜ばしむること以上には、何らの邪しき意図もなかつたのである。すなわち真女子にとつてのこの現在が、たとえ豊雄の未来を奪つてしまふ結果になるとしても、そのことを憂慮するような論理は真女子の中にはない。

この「蛇性の姪」では、そうした真女子の持つ蛇性（異類）の論理と人間界のそれとの間に生じてくる齟齬が物語全体を支える重要なモチーフとなつてゐるが、この点においてこそ秋成の「白娘子永鎮雷峰塔」に対する重大な発見があり、またその発見を通して物語に新たな視点を導入すること、原典をあくまで原典として消化しながら主題そのものを全く別の位相に置き換えていった手腕のほどがうかがえよう。この破綻にいたるきっかけとなる事件そのものは原話である「白娘子永鎮雷峰塔」においても法海禪師が白娘子の正体を許宣に暴いてみせるという形で描かれていたものであるが、これ以降原典では、薬屋が圃で、あるいは許宣の兄が部屋をのぞいて、白娘子の正体が大蛇であることを見てとるといふふうに、再三にわたつて大蛇に魅入られたことの恐ろしさが卑俗な興味とともに強調されるのであり、そこにまた物語の中心も置かれていたのである

が、秋成はこの事件を契機として物語の後半を蛇性に帰つた真女子の論理の跳梁にあててゐる。

豊雄にとっては真女子の都風みやこびて女らしい美しさを愛したのであつたが、ひとたび自分がその許されざる人獣婚のタブーを侵したことがわかつた以上、この忠告を契機として丈夫心ますしんへ向かう道を歩み始めるのであり、一方最初からその本質において人間の掟を持たない真女子にとっては、いっそその本性である蛇性を露わにし、そのことがかえつてみずからのさらなる破綻を生み出してゆかざるをえないという矛盾の中に追い込まれてゆくのである。しかしまた、それとても真女子自身にとっては矛盾ではなく、富子に乗り移り、彼女を死にいたらしめることも、蛇性の本性を豊雄の前にさらしてしまふことも、強烈な自己追求の結果にはかならなかつたのである。そしてそのためには「君が血をもて峯より谷に灌ぎください」という行為さえをもなしうるのが真女子の本性なのであり、またその論理でもあつた。そしてそれこそはまさしく人間的裁量をはるかに超えた蛇性の論理であり、この点にこそこの「蛇性の姪」を特質づける問題も存しているのである。すなわち雨月物語の中で女性像をあつかつたものとして先にもあげた他の二つの作品「淺茅が宿」と「吉備津の釜」は、ともに人間の女性が、しかもそれが女性であるがゆえに自己の置かれた状況に対して、自己の力だけではいかんともしがたく、究極はその情念が霊となつて解

放されたことによって初めてその本質を顕現してゆくのである⁽²⁾、そこに女性の持つ原質的な特性のあり様が追求されたが、真女子はこの図式にはあてはまらない形で造型されている。宮木、磯良の二人は自身ではまさにいかんともしがたく、その故にその怨念が霊となっていたのであるが、真女子だけは唯一状況に対して主体的な働きをなしうる女性であった。すなわち真女子の場合は、豊雄を想う情念の果てに蛇性と化したのではなく、その逆に蛇性の情念が美貌の女性の姿をかりたものとして構成されていたのである。

では、真女子だけがなぜあえて蛇性（異類のもの）として設定されたのかという疑問が当然ここに生じてこよう。蛇性であるが故に真女子は後段で富子を殺してしまったとはいえ、彼女の豊雄を想う愛着の強さは一途なものであり、そのかぎりではきわめて純粹であるとさえいえるが、それがひとえに蛇性であるばかりに忌まれ、また互いに想いあっていた筈の豊雄にさえも、うたてきものと怖れられ、最後には永遠に鉢の中に埋められねばならなかったのは何故であるのか。

その点にこそ秋成のこの作品における人間追求の深さと、そして同時にまた時代性の限界も存していたと思われるのであるが、すなわち当時の近世封建体制下において、人間が真に人間としての発露を十全に発揮するためには畢竟人間社会の掟を逸脱しなければならぬ⁽³⁾という大きな矛盾にぶつからねばなら

ず、真女子が女の本性としての愛欲を追求しつづける存在たりうるためには、それはとうとう異類のものでしかありえなかったということである。愛に一途であり純粹であろうとすることは、人間界の約束事をふみこえてしまうことにはかならず、封建体制下においては、とうてい許されざることもあった。ここに真女子をあえて異類のものに設定せざるをえなかったことの意味があり、この作品の持つ主題の複雑さも、また構成上の特異性も、この認識の上において考察されなければならないであろう。

註

(1) 前掲「雨月物語評釈」、また「雨月物語構想論」にもこの指摘がある。

(2) 拙稿「吉備津の釜の構造」(日本文芸研究第三十一巻第四号所収)を御参照いただければ幸いである。

(3) 「別冊現代詩手帖上田秋成」のシンポジウムにおける松田修氏の御指摘。

三

前章まで、豊雄と真女子のそれぞれの人間像について述べてきたが、次に全体の構成上の問題についてふれておきたいと思う。

物語は観念的な前説部を持たずに始まっているが、ただし物語全体の主題構想を豊雄の人格発展劇を中心として見るとすれば、「蛇性の姪」のすぐ前に置かれた「吉備津の釜」の前説

部がここにも投影されていそうである。すなわち「吉備津の釜」においては

婦を制するは其夫の雄々しきにあり

としながらも、その物語の中ではむしろ雄々しからざる夫正太郎の悲劇が描かれており、物語と前説部の内容とが逆の関係になっていったことに注意したい。もっともこれも秋成一流の逆説的な表現手法であると言うこともできようし、また「読者と作者が共有する『エトス』の提示」ととらえることもできるであろうが、そのいずれであるにせよ、「蛇性の姪」における「生長優しき」豊雄の「雄々しき」にいたるという物語の構造はこの二作品にちょうど表裏の関係を与えているし、少くとも配列の上に工夫と配慮のなされていたであろうことはまちがいないであろう。

「蛇性の姪」は雨月物語の九篇中では最も長く、「いつの時代なりけん」と書き起こされる冒頭部をもつても源氏物語の「いづれの御時にか」を踏まえて、長篇小説としての構想を持っていた³。また物語の展開してゆく舞台も、紀の国三輪が崎から大和石櫛市、さらには吉野へと、それぞれ歌枕となる場所が選び出され、その時間をあえて限定しない起筆部とともに、この作品に古物語の持つ浪漫的な情調を与えているとともに、それらの場所が古来より一種の神域であることから、蛇性という特異な設定を無理のないものにしてもいるのである。

さて物語はこの三輪が崎で

けふはことになごりなく和たる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そほふり来る

ことによつて豊雄と真女子が海郎が屋で出会うところに始まるが、この三輪が崎は熊野の神域であるとともに、

くるしくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに

と万葉集に詠まれた古代的なものを残した土地でもあった。そのうえにまたこうした一つ家の形式はそれ自体が伝統的な一つの怪談のスタイルを構成する要素でもあり⁴、したがって読者にはすでにそこに物語展開への期待の高まりとともに、同時にある種の不穏な情景が感じとれるのである。またこの一つ家の形式は、雨月物語に先立つ、草子作家としての秋成の「諸道聴耳世間猿」三之巻に収められた「器量へ見るに煩惱の雨舎り」を想起させもする。そこでは隅田川のほとりで舟遊びをしている時に俄雨に降られた柳屋権兵衛という男が、近くの尼僧庵に雨やどりをし、美しい尼に饗応を受けるが、その尼僧は武芸をことのほかの楽しみとし、あげくは手合わせを強要され、おそれをなした権兵衛は命からがら逃げ出してしまうという一種の奇談として描かれていたものであるが、その趣向においてはたしかに「蛇性の姪」と共通するものを持っているし、この作品の中に雨月物語へと発展してゆく初源的なものを認めようとする森山重雄氏の説は興味深いものがある。同じく雨月物語の中では

「浅茅が宿」が「世間妾形氣」巻の三「米市ハ日本一の大湊に買積の思入れ」「二度の勤八定めなき世の蜷川の淵瀬」の延長上にあり、それが発展したものであることが指摘されているが、この「蛇性の姪」では、世間猿の「器量ハ見るに煩惱の雨舎り」が「中世的一つ家形式を近世化した風刺」であつたとすれば、それをもう一度中世的、あるいは王朝の世界に置き換えることで、単なる奇談に終わらせることなく、ありうべき現実を超えて、ありうべからざる真実相を真女子と豊雄の中に構造的に提示したものであるといえよう。そうしてそれはまた同時に「ぬば玉の巻」に示された寓言の方法によるものにほかならなかつたのであり、したがってここでは草子において習練された原典の処理が、単なる着想の域だけに終わることなく、いっそう錯綜したものとなっていることにも注目しておきたい。

先にも述べたごとく物語はその典拠である「白娘子永鎮雷峰塔」のプロットに忠実なまでに従いつつ進行するが、原話がもとさらに読者に白娘子の正体をくりかえし知らせることでテーマを提示してゆくのに対して、秋成は「蛇性の姪」においてこの原典を読者に想起させつつも、「小雨そぼふり来る」にはじまって暗示の上にさらに暗示を重ねてゆくという手法をとり、含みを持たせた展開の中に物語するという文学的な位相にまで高めていくのである。そしてこうした暗示による方法は、さらに豊雄の夢とその実現「正に現なるを却て奇しみたる」、第一の

事件の後の「女はいづち行けん見えずなりけり」へと漸層的に積み重ねられてゆくが、ここに流れている時間は、現実・事象を定着させるそれではなく、夢幻的な物語の時間をとっていることも構成上大きな効果をあげている。またこうしたイメージの重層化の方法は「あやし」という語を反復重用することによって、なお読者の精神を物語世界へとかきたててゆくが、これも源氏物語の「夕顔」の巻に見られる方法の踏襲であることは、すでに後藤丹治氏の御指摘のとおりであろう。

これまで豊雄・真女子の人間像を探る上でプロットの展開に關してはその原典を「白娘子永鎮雷峰塔」に求めてきた。同様に秋成の意図もまたこの原典を読者に想起させ、その重ね合わせの上に作品を読みすすめさせることにもあつたであろうが、ただそこにはもう一つ逆の物語もまた重ね合わされていたのである。すなわち紀の国にその物語の舞台を設定していたことは、単にそこが神的・靈的な場所であるからというにとどまらず「真女子」という名⁶⁾、そしてその実体は蛇と重疊させてゆくと、そこにある明確なイメージが自然に浮かびあがってくる。すなわち中世以来、演劇や語り物の中で伝えられてきた道成寺伝説がそれである。読者が作品を分析的に読みすすめてゆくとつれて、その底流に「白娘子永鎮雷峰塔」のあることが納得されるが、しかしそれに先立って先見的にこの道成寺伝説がまず読者の中にひとつのイメージを形づくってゆくであろう。そし

て安珍に対する強い愛着と失意の果てに蛇と化して男を追うという清姫の像は、真女子の上にそのまま重なり合う。ところが道成寺伝説では清姫が愛執の果てに蛇体と化したのに対して、

「蛇性の姪」では、図式がちょうどその逆になっており、愛欲に満ちた蛇が真女子という女性に姿を変えて豊雄を追うのである。つまり道成寺においては、蛇は女の愛欲の究極の姿として象徴化されたのに対して、「蛇性の姪」では、この象徴化された愛欲が逆に真女子という人間的実体を持っているのである。

物語はその展開において、この逆の関係にある両者のイメージの錯綜するところにその構造が提示されていたと見られるが、このことは豊雄の「あだ心」から「丈夫心」へといたる性格発展劇と、ちょうどその逆に蛇性の真女子がしだいに崩壊してゆく過程とが対応するという背反の二重性をとった主題構造とあいまって重要であり、その構造のあり方の中にこそ主題性が求められるべきであろう。

註

- (1) 徳田武「説本における主題と趣向」(国語と国文学「昭和四十六年十月号所収」)
- (2) 前掲「雨月物語評釈」
- (3) 同。
- (4) 前掲「雨月物語構想論」
- (5) 「上田秋成初期浮世草子評釈」(国書刊行会)解説。
- (6) 前掲「雨月物語評釈」
- (7) 前掲「上田秋成初期浮世草子評釈」解説。

- (8) 「雨月物語出典をさぐる」(解釈と鑑賞第二百六十五号所収)
- (9) 前掲「雨月物語構想論」

四

最後にこの作品の主題について考察したいが、本篇に関して最初にあげた豊雄の人間的成長の中に主題を求める中村幸彦氏の説をはじめ、これと並存して真女子の中に本然的で純粋な人間性情の追求を見ようとする鴉月洋氏の説^①や、あるいは封建制の粹の中で人間がいかに自然の欲求と情熱とを押し殺されてきたかにテーマを求める森山重雄氏の説^②などがあげられている。

秋成文学においてはしばしばひとつの思想性とそのモチーフとなつて物語が展開されているが、これはまた形気ものの草子から同心円的に拡がりを持つて発展した雨月物語の基本的性格でもあった。それはあるいは前説部の形をとり、またあるいは物語の中で主人公の口をかりて抽象的に示されているが、この作品の中で注目するとすれば、物語の後段、吉野で真女子の正体が明らかになって後、真女子に乗移られた富子の命を救うべく、豊雄はついに決意して真女子のもとに向かうが、その時に「人かならず虎を害する心なければ、虎反りて人を傷る意あり」と真女子に語るくだりである。実はこの言葉もまた原典白娘子の「人ニ虎ヲ害スルノ心無クトモ、虎ニ人ヲ傷フノ心アリ」か

らほとんどそのままにとられたものであるが、ここには原話以上に主題提示の上で案外大きな問題が隠されていたのではあるまいか。もちろんこれは簡単な比喻でもあり、虎が真女子をさしていることは言うまでもないが、人間として設定されず、異類の蛇性として設定された真女子には、先にも述べたごとく、人間にははかり知れない蛇性の論理があり、真女子はその宿命的な論理に忠実にしたがっていたのである。

雨月物語においてはつねに人間に最大の関心がはらわれ、その人間性の根元的なありようが、斯界と他界との時空をはるかに超えて形象され、追求され続けてきたが、真女子の本性は人間ではなく、ついに蛇性のものであった。そして蛇性の持つ彼女の論理は非情のものとして人間とは別の次元に立っていたのであるが、「吉備津の釜」の磯良もまた生霊・死霊となつて後は、まさしく復讐の鬼と化したのであり、その目的は異にしつつも非情の論理にしたがつて行動する点においてはこの真女子に通じるものであり、そうした点を考え合わせると、前説部の共有、正太郎と豊雄に見られる性格造型の共通性以上の関係がこの二作品に認められよう。極論になろうが、たとえばかつての「世間妾形氣」においても連続した話を「米市ハ日本一の大湊に買積の思ひ入」「二度の勤へ定めなき世の蜷川の淵瀬」と二つに分けていたことなどから類推すると、あるいは「吉備津の釜」とこの「蛇性の姪」とは主題において共通する二話だったので

はあるまいか。すなわちこの二つの作品においては人間と非情の論理とを対立させつつ、そうすることで逆に人間の持つ論理を相対化しようとする認識的な物語造型の方法がとられていたのであり、ことに「蛇性の姪」では真女子を蛇性とすることにによって逆に人間社会のエートスの構造を照射することに物語の構想が置かれていたのではないかと考えられるのである。

真女子はその宿命的な非情の論理によって豊雄を愛し、またその愛欲をまっとうするためには、その愛の邪魔者である富子はおろか、当の愛欲の対象である豊雄の命をさえ奪いとうとするのである。それはまさしく奪いとする愛であり、豊雄が真女子のそうした愛に応えているかぎりには真女子の側には豊雄に対して積極的な殺意は生じないが、しかし愛欲をつくすことは、かならずしも殺意とは別に豊雄の命を縮めてゆく結果になることは、先にも見たごとく翁の言葉によるとおりである。こうした真女子の持つ蛇性の論理と、豊雄のそれとはもは一致しないものであり、ここに人獣婚のタブーが確認されるのである。そして当初は浮浪子として社会的な規範のやや外側に立っていた豊雄ではあったが、ここにいたって蛇性を前に直面した時、彼は人間の側に立つのであり、この転生は「心収め」た豊雄の精神の自立としての意味を持っていた。ただそれは規範的な社会の判断によるものではなく、豊雄が極限状況に置かれた時に、彼個人の中で決意された「丈夫心」によるものであつ

た。すなわち豊雄は社会の規範が概念的な形でしか排除しえなかった人獣婚を、みずからの個人的な体験を通して、個人の精神の問題としてとられ直すのであり、そうする過程を通して、秋成はこの作品にモラルのありかと同時に高い思想性を示しえたのである。

註

(1) 前掲「雨月物語評釈」

(2) 前掲「雨月物語・春雨物語」